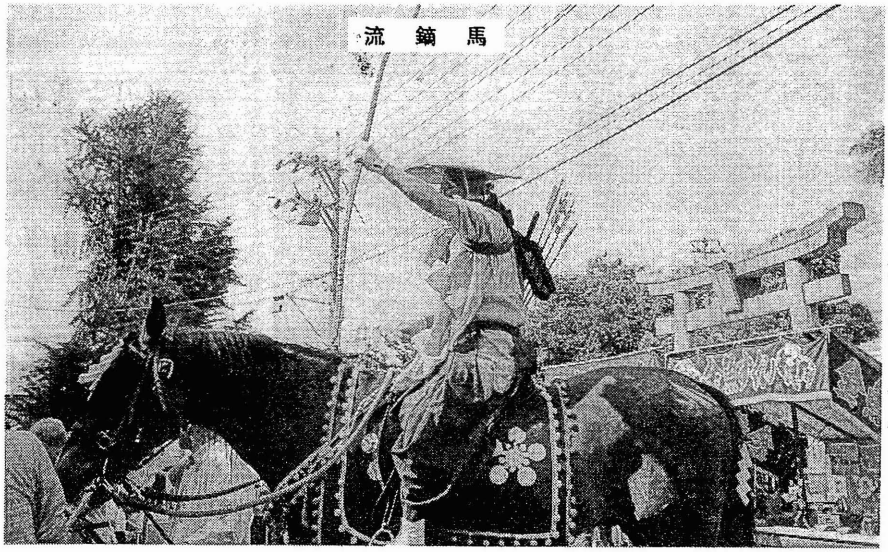

馬上から的を射たそうです。その方が古式に添った神事ということですが。

馬が引き返して来る間、大歳神社に参拝し石段の上から周囲を眺めながら、道路が舗装されてなかった古い時代の流鏑馬の様子を想像し、時のながれをしみじみと思うひとときでした。昔は、娯楽の少なかったことでもあり、流鏑馬の勇ましい姿を見て、憧れを持つ少年もきっといたに違いありません。

私は、廿日市の住人になって、もう四十年近くになります。勤めの都合上、この度初めて、御陵衣祭を拝観させて戴きました。

古式ゆかしい御陵衣祭の諸々の神事に、この度身をもって接して、私は深く感動いたしました

かって私も、厳島神社で舞楽を拝観したことがありました。その姿や豪華絢爛、平安の美を現し世に見る思いして、今も心に焼きついていますが、しかしその時は、大勢の人の背中越しに垣間見たものでした。この度は廿日市は地御前で、それも昇殿の上、目の当たりに拝観できて、天にも昇る思いして感動も一入となりました。

地御前大歳神社の御陵衣祭は、今後廃れることなく、幾世代も継承されて行き、廿日市の「まつり」として、末長く保存されることを願わずにはいられません。

ここ地御前神社は、古くは厳島神社の外宮として存在していました。即ち往時の厳島神社は、内宮たる厳島神社と外宮たる今日の地御前神社の二社で成り立つ神社であったと云います。

内宮、外宮とも何度かの火災その他の災害に会い、宝暦五年（一七五五）外宮本殿、御旅所などが消失後、宝暦十年（一七六〇）に本殿、拝殿が再建され、この二宇の本殿が現存しています。

以上のことは、古書その他の文献によるものですが、中でも新校群書類従の「道ゆきぶり」の一節に、

「廿一日はこの佐西群を出でて地の御前という社の西ひがたより山路に入るほどに」とあるを知りました。

これは、今川了俊が書き記したものです。

今川了俊は室町時代の人で建徳元年若しくは応安三年（一三七〇、年号が二つあるのは時、南北朝を示す）九州探題となっています。武人でもあり、歌人でもありました。

私はこの文章に出会い、嬉しくなると同時に、歴史の重さを感ぜずにはいられませんでした。

御陵衣祭を、もう何度も参拝された人もおられましょうが、私のように廿日市に住みながら、素晴らしく伝統ある「お祭り」に参加する機会のなかった人、或いは、知らなかった人もおられるのではないかと思います。

皆さんも是非、地御前神社に御参拝なさって「お祭り」に参加してみて下さい。そして諸々の神事に触れて見てください。きっと御陵衣祭の素晴らしさと、歴史と伝統の重さとゆかしさを、身に沁みて感じることゝ思います。

この度の「御陵衣祭」に参加し、私は多くのことを知り、色々なことを教わりました。

特に大歳神社、飯田元隆宮司さん始め多くの方々には、一方ならぬお世話に相成りました。なお宮司さんには私の質問にも、的確にお答え戴き、感謝の言葉もございません。また地御前公民館の星野昭治館長さんには「御陵衣祭」について一文をお寄せ戴き、こゝに紙面の都合上、要約して転載致します。

『歴史と伝統ある、この「御陵衣祭」を単に地域の「お祭り」としてではなく、廿日市市の「祭り」として喧伝してほしい。それには、市当局、観光・郷土文化研究・その他、地域の方々、それに神主を加えて、協議し、歴史と伝統に彩られた「御陵衣祭」を市の文化として継承して行ってほしい』

■参考文献＝廿日市の文化（六・一九）「厳島神社外宮地御前神社の建築・三浦正幸」芸藩通志他